

際間の政治的轉移が詳しく講ぜられてあり、特に著者は常に國際關係に注目を怠つて居ない。今まさに世界的地位に在る我國民の世界的知識の養成に資さうと云ふ著者の意向はこゝに見出される。十六世紀から十八世紀末に至る迄の歐洲政治史の好個の參考ならう。原語を並記した索引も讀者には大變ありがたい。地圖その他の圖録はない。(明治書院發行、三、〇〇)(猪谷)

● 歐洲經濟史

本位田祥男著

日本評論社刊行の現代經濟學全集中の一編である。凡そこの叢書はその性質としてなるべく穩健中正な一般の通説を平易に一定の紙數の中に講説することを目的とするが故に、この書も亦特に著者が自己の新見解新研究の類を掲げてその當否を學界に問はうとしたものではなく恐らくは彼が其の生涯の事業とする世界經濟史の研究に出發點を與へるに共に他面よき入門書の少いこの方面に手頃な指針を供して頼に高まりつゝある一般社會の要望を満たさんこゝを試みたものであらう。著者はまづ紀元

始めグルマーネンの登場を以て歐洲經濟史の始期とする。と共に其後の歐洲を經濟的に一の統一體と見做し、之を前資本主義並に資本主義の二大期に分ち、更に兩者をそれと三分して共產村落、莊園ギルド、及び商業資本主義工業資本主義、金融資本主義の時代と名づけ其の工業資本主義時代を以て敘述を終つてゐる。數多い碩學達によつて提示された既存の發展段階説に兎もすれば拘泥束縛され勝ちなこの方面に比較的自由に時代を分つと共に、之を以て世界史の全體を律すべきものとせしめて普通に所謂中世以後の西歐にのみ限つた所に著者の穩健なる學問的性格が認められるであらう。敘述また平明、徒に引用や参照やを本文の間に挿入することなく前後一貫同一の文體を以て通讀に便してゐる。卷末に三十八頁に互つて參考書名を挙げたのは讀者を益すること多いであらう。(菊判三九三頁、東京日本評論社)(柴田)

● 郷土地理研究

小田内通敏著

土地に即して營まれる我々人類の生活の考案には土地